**木村　久邇典 （きむら・くにのり）**

**１、プロフィール**

文芸評論家。山本周五郎研究・評論の第一人者で著作が多い。直接師事した太宰治の回想『太宰治と私』（昭和51年）をはじめ、太宰治に関わる周辺作家のエッセイもある。

＜生没＞

1923（大正12）年７月11日～2000（平成12）年４月12日

＜代表作＞

『太宰治と私』「在りし日の太宰治」『人間　山本周五郎』『山本周五郎襍記』『山本周五郎』（上・下2巻）

＜青森との関わり＞

札幌市生まれ。両親の故郷西津軽郡木造町で育つ。戦後、金木町に疎開中の太宰治を訪ね、師事するに至る。

**２、作家解説**

大正12（1923）年北海道札幌市生まれ。両親の故郷である青森県西津軽郡木造町（現つがる市）で育つ。昭和16年中央大学予科入学。19年海軍予備学生。20年秋復員、21年中央大学法学部卒業。労働文化社編集記者となり、昭和37年朝日新聞社東京本社校閲部に転じ編集局勤務となる。

太宰治と。学生時代から太宰文学を愛読。最初に読んだのが「帰去来」。「富嶽百景」に接し、精神の激しい痙攣を覚えたという。三鷹在住の太宰に会いたいと願望。戦後、太宰が疎開中の金木町で叶えられる。以後太宰の死まで師事が続く。太宰に関わる最初の文章は、師事した仲間や旧友が思い出を書き寄せた『太宰治の肖像』（昭和28年　楡書房）への記事。太宰と周辺の文学者の回想をまとめたのが『太宰治と私』（昭和51年　小峯書店）である。その中で直接太宰を扱ったのは、「太宰治と私－宿命の創造－」、「話術の天才」「税金とプチブル趣味」「『如是我聞』をめぐって」である。太宰周辺の文学者については「太宰治と安吾・作之助」「『火宅の人』が語るもの－檀一雄の死」「小山清さんのこと」「無頼派と戦後」などがある。他に「在りし日の太宰治」（平成８年　「太宰治研究」３号）。テレビ脚本に「太宰治の津軽」がある。

山本周五郎と。青森県の風土や作家に興味を持っていた山本周五郎が、木村久邇典の故郷が木造町と知り親近感を抱く。木村は労働文化社編集記者時代に山本係となり戦後20年余も彼の身辺にあった。山本への傾倒が深く、山本周五郎研究・評論の第１人者となる。全集、文庫解説が多く、著書も『人間山本周五郎』（昭和43年　講談社）『素顔の山本周五郎』（昭和45年　新潮社）『山本周五郎襍記』（昭和45年　中央大学出版部）『山本周五郎のヒロインたち』（昭和54年　文化出版局）『男としての人生－山本周五郎のヒーローたち』（昭和57年　グラフ社）『山本周五郎はどう読まれてきたか』（昭和61年　新潮社）『周五郎に生き方を学ぶ』（平成７年　実業之日本社）『山本周五郎』（上・下２巻　平成12年　アールズ出版）など多数にのぼる。

なお、「青森県と山本周五郎」（「月刊あおもり」　昭和44年７月号）がある。この記事は『山本周五郎襍記』に収められているが「津軽と山本周五郎」と改題されている。

**３、資料紹介**

〇『太宰治と私－宿命の創造－』

図書

1976（昭和51）年７月15日

縦244mm×横177mm

太宰治を疎開中の金木町（現五所川原市）に訪ね（S21．２）てから、三鷹引き上げ（S21．11）、その死まで（S23．６）の交遊を、太宰の作品をまじえての回想文。末尾の著者メモ「宿命の創造」で、太宰文学は、人間への不信、芸術への絶望、既成道徳への反逆であったと結ぶ。